

白鷗大学論集 第32巻 第2号

論文

発達障害幼児に対する個別発達プログラムの作成と 保護者への心理的な支援の在り方に関する研究

清水 浩

Development of an Individual Development Program for Children
with Developmental Disorders Study on the way of Psychological
Support for Parents

SHIMIZU Hiroshi

I 問題の所在と目的

特殊教育から特別支援教育への転換が図られ、特別支援学校は今まで求められてきた役割から地域に向けて特別支援教育のセンター的役割を果たすなど、これまで行ってきた機能をさらに拡大して様々なサービスの提供が求められるようになってきている。

中央教育審議会初等中等教育分科会においてとりまとめられた「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」（2012）においては、特別支援学校は、「今後、域内の教育資源の組合せの中でコーディネーター機能を発揮し、通級による指導など発達障害をはじめとする障害のある児童生徒等への指導・支援機能を拡充するなど、インクルーシブ教育システムの中で重要な役割を果たすこと

が求められる。」また、「特別支援学校のセンター的機能を効果的に発揮するため、各特別支援学校の役割分担を地域別や機能別といった形で明確化しておくことが望ましく、そのための特別支援学校ネットワークを構築することが必要である。」とされている。このようなことから、特別支援学校機能強化モデル事業が開始され、必要に応じて外部人材の配置・活用を行い、特別支援学校全体としての専門性を確保するとともに、各特別支援学校の役割分担を地域別や機能別に明確化するなど、特別支援学校のセンター的機能の強化が求められている。

古川（2002）は、特別支援学校の持つ様々なセンター的機能を、①相談機能、②指導機能、③研修機能、④理解啓発機能、⑤情報提供機能、⑥生涯学習機能の6つに分類しているが、各学校においては、今までの職務内容を整理統合しながらセンター的機能の充実を図っていくことが必要であり、その中でも特に教育相談機能がセンター的役割の中心と位置付けられている。

A県においては、県内全特別支援学校に就学前幼児を対象とした幼児教育相談室が設置されているが、その中のB校においては2003年度から就学前の障害幼児を対象とした幼児教育相談を実施している。教育相談室に来室する発達障害幼児に対する教育相談では、保護者の主訴がはっきりしておらず、言葉の遅れが気になるということで、教育相談に来室してくる保護者が多くみられるのが現状である。

石隈（1999）は、「学校においては、学校心理学の援助サービス3段階モデルにおける、特定の子ども（不登校、いじめ、LD、非行等）に対する三次的援助サービスに対する心理教育プログラムの開発が求められている。」と述べている。また、「自閉症を含む発達障害の発症率は、現在では1%程度と指摘され、そのうちの50%～75%が高機能群であることが分かってきている。」という杉山（2004）の報告などからも、今後特別支援学校においては、LD・ADHD・高機能自閉症等に対する発達プログラムの在り方や、教育相談支援体制を充実させていく必要がある。さらに、特別支

発達障害幼児に対する個別発達プログラムの作成と保護者への心理的な支援の在り方に関する研究
援教育の対象児童生徒は、一次的な特有の困難・問題が解決されずに長い年月持続していくと、二次的な困難・問題に発展していく危険性が高く、問題の早期発見、問題への早期対応、問題の早期解決が重要となってくる。

以上のことから、特別支援教育の対象とする幼児の教育相談をとおり、アセスメントや個別発達プログラムの作成、保護者への心理的な支援の在り方などについて検討していくことが、特別支援教育を推進していく教員に求められている。

今回の研究では、発達障害児に対するアセスメントと個別発達プログラムの作成及びそれに基づく保護者への心理的な支援の在り方を検討する。

Ⅱ 方法

1 手続き

(1) 対象者

A県立B特別支援学校幼児教育相談室を利用しているA児(男、3歳1ヶ月)及び保護者(母親)

(2) 方法

①アセスメント

②個別発達プログラムの作成及び保護者への心理的支援の在り方の検討

③支援の実際

(3) 時期

200X年6月～200X+2年4月

Ⅲ 結果

1 アセスメント

(1) 生育歴及び主訴

妊娠中問題なし。始歩12ヶ月、始語1歳6ヶ月、二語文2歳9ヶ月。

1歳6ヶ月の健康診断で市保健婦よりことばの遅れを指摘された。発語に遅れがみられているので、どの位遅れているのかを知りたい。また、現在は二語文が出てきたところではあるが、不明瞭な部分も多くみられる。具体的には、ビデオをずっとみていることが好きで、消すと怒りだすなどききわけがなく、ビデオテープやミニカーを一行に並べるなど特定のものにこだわる様子等もみられる。

(2) 発達検査

①遠城寺式・乳幼児分析的発達検査

移動運動（3:8～4:0）、手の運動（2:6～2:9）、基本的習慣（2:9～3:0）

対人関係（2:3～2:6）、発語（1:6～1:9）、言語理解（1:9～2:0）
平均2.6、全体DQ92

②絵画語彙発達検査

語彙年齢VA（3:0）、修正得点10、評価点SS10

③S-M社会生活能力検査

身辺自立（2:4）、移動（2:11）、作業（2:9）、意志交換（2:0）
集団参加（2:7）、自己統制（1:8）、SQ84、SA 2:4

④太田Stage評価法

LDT-RI 6／6通過、LDT-R II 3／6通過、Stage IIの段階。

名詞は分かるが用途は分からない。Piagetの感覚運動期から表象的思考期の初期への移行期でシンボル機能の芽生えの段階。健常児の1歳半～2歳位に相当（IQ55～70）。

(3) 行動観察

机上での学習には落ち着いて取り組むことができていた。切片パズルの完成やペグさしなどは好んで行うことができた。実物と絵カードのマッチングはほぼ確実にでき、食べ物の名前（もも、にんじん、だいこん等）もいくつか言うことができた。

(4) 所見

生理・医学的側面では、特に問題はなし。心理・学習・教育的側面では、言葉があるが、数も限られている。物の名称が分かってきている段階であり、日常の簡単な指示に応えられる。環境・社会・文化的側面では、本児には姉がいるが、やはり本児と同じように幼児期に言語の面で遅れがみられていた。幼稚園に入る頃には発語が増えてきて、現在では言語面において問題はないと思われるが、まだ時々集団の中に入っていけない場面もみられる。

2 個別発達プログラムの作成

(1) 発達障害幼児に対する個別発達プログラム

作成した個別発達プログラムは以下のとおりである (Table 1)。

心理教育的アセスメントに基づいて教育援助開始時の教育援助の方針と内容を計画した。

Table 1 個別発達プログラム

課 題	内 容
1 導★手遊び歌	・手遊び歌に合わせて、身振りを模倣する。
2 主★絵の完成 (Stage II で重点課題)	・切片を合わせて、一枚の絵を完成させる。
3 主↑目と手の協応 (Stage I-2、I-3 で重点課題)	・同じ型を選びさし込む。
4 主↑色・形の統合と分解 (Stage II の学童以上で重点課題)	・マトリックスの表を完成して言語表出する。
5 主↑大きさの比較の理解 (Stage III-1 で重点課題)	・大きい (小さい) のちょうだい。
6 主★マッチング (Stage I-2 で重点課題)	・実物と絵カードを合わせる。
7 主↑名詞による御用学習 (Stage II で重点課題)	・絵カードを見て、実物を取って離れた所から持ってくる
8 主↑チャンキング (Stage III-1 で重点課題)	・貼られている場所のカードに対応する関連物のカードを貼る。
9 主↑数詞と物の対応・1～5までの数 (Stage III-1 で重点課題)	・実物とドット、実物と指を合わせる。
10 終★目と手の協応 (Stage I-2、I-3 で重点課題)	・パズルボックスに型をはめる。

長期目標では、言葉、遊び、描画、模倣など多方面からシンボル機能の芽生えを確実にすることと、人への関心の芽生えを適切な方向へ伸ばすこと等が主なねらいである。

短期目標及び支援方法では、①行動のパターンだけを学んでしまう傾向が強いので、課題のねらいを意識すること、②できない課題は早めに切り上げ、学習意欲がそがれないようにする、③机上だけでなく学習形態に変化をつける（指示された物を取りにいくなど動きのある課題を工夫する）、④動機づけを大切にする（好きなもので興味を引き出す・身体接触ではめる・課題の正否にかかわらず努力をほめる・ごほうびを期待させ頑張るよう促す等）等が主なねらいである。

（２） 保護者への心理的支援

母親の心配事としては、まだ二語文がでてきたところで、発音も不明瞭なところが多い。近所の２歳６ヵ月の男の子は、もう４０以上も言葉を話しており、比べてみると心配ですということだったので、以下のような支援を行った。

Table 2 日頃の関わり方への支援内容

領 域	具 体 的 内 容
1 聴力	音が聞こえたとき、どんなふうになりますか。
2 言語理解	おとなの言うことが分かっていますか。
3 対人関係	おとなに相手をしてもらうのが好きですか。一緒に遊ぶのは好きですか。欲しいものがある時や困ったとき、おとなに頼りますか。
4 発声	よく声を出しますか。
5 模倣	身振りや声のまねをしますか。
6 生活のリズム	睡眠、食事。
7 体を動かすこと	楽しい遊びを行っているか。
8 こころの安定	うれしい・楽しい気持ち、安心して頼れる人。

発達障害幼児に対する個別発達プログラムの作成と保護者への心理的な支援の在り方に関する研究

言葉が遅いかなと思うときは、言葉ができるための準備ができているかどうかを確かめることが必要なので、日頃の関わり方として次の８点についてチェックしていただくことにした（Table 2）。

以上のような、普段の生活の中で、具体的にどのように関わったらよいのかについて支援を行った。

Ⅲ 指導経過

１ 発達障害幼児（Ａ児）

Table 3 は、200X 年 6 月～200X + 1 年 2 月の課題及び達成状況である。

平均すると毎回 8 個程度の課題を約 50 分間で行っている。Stage I ～ II の課題がほぼ確実にできるようになってきているので、ここ数回は Stage II、Ⅲ の引き上げ課題を取り入れている。また、学習形態に変化を付け、カードを貼りに行く課題などを取り入れ楽しく学習を行えるようにしている。課題は机の上に並べておき（チェック表を使える段階ではない）、終了したら床に置くようにして見通しをもたせている。

1 つの課題が終了したところで、課題への取り組みの様子を保護者と一緒に振り返り、確認し合う。

２ 保護者

発達障害幼児（Ａ児）の個別発達プログラムの実施に併せて保護者への心理的支援を行った。

以下に、保護者の時系列的変化を示す。

（１） 200X 年 7 月

現在の状態と今後の発達の筋道を丁寧に伝え、今は、課題をとおしてのやりとりの中で言葉を増やしていきましょうという話をした。家でも言葉は増えてきているという話があった。

（２） 200X 年 9 月

特別支援学校における教育課程及び言葉の獲得過程について説明する。

また、言語面において、きちんとした診断は受けられるのかということであったので、近くにあるC大学言語聴覚クリニックを紹介した。

Table 3 課題及び達成状況

課題	評価（1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	6回目）
1 手遊び歌	△	△	△	△	△	△
2 ビーズ通し（Stage I-2、I-3で重点課題）	△	○	○	◎	-	-
3 ペグさし（Stage I-2、I-3で重点課題）	△	○	-	-	-	-
4 切片パズルキリン（Stage IIで重点課題）	○	○	◎	◎	◎	-
5 円柱さし（Stage I-2、I-3で重点課題）	△	○	○	○	◎	-
6 実物と絵カード（Stage I-2で重点課題）	-	◎	◎	◎	◎	◎
7 物を取りに行く（Stage IIで重点課題）	-	◎	-	◎	○	-
8 ねらって叩く操作（Stage I-2、I-3で重点課題）	○	-	-	-	-	-
9 マトリックスの理解（Stage IIの学童以上で重点課題）	-	-	-	-	○	◎
10 チャンキング（Stage III-1で重点課題）	-	-	-	○	-	○

（※導：導入課題、主：主要課題、終：終了課題、↑：引き上げ課題、

★：動機づけ課題、◎：簡単にできる、○：ほぼ確実、△：芽生え・不安定、×：全くできない）

（3）200X年10月

言葉の発達について説明する。初語→一語文語→多語文語→命名期→質問期となっているが、そのうちの命名期を迎えている。大学等で行われて

発達障害幼児に対する個別発達プログラムの作成と保護者への心理的な支援の在り方に関する研究
いる勉強会に参加したいとのことであった。

(4) 200X + 1 年 3 月

幼児教育相談室に通室することが好きで、そこで楽しく学習に取り組んでいる本児の姿に満足しているという話だった。また、4 月から幼稚園年少の年齢になるが、1 年間は入園しないで、今までの子どもに合った生活を送りたいとのことだった。

IV 考察

1 対象者の変容

約 1 年 10 ヶ月の教育相談であった。太田の Stage II の段階から、Stage III-2 までの認知発達がみられた。後半の教育相談では、関わり手とのやりとりを楽しみながら課題に取り組めるようになってきた。また、課題もいろいろできることが増えてきた。今後は、4 月より学年が上がり、集団の中での取り組みなどが増えてくると思われるので、グループ相談にもたくさん参加できるように働きかけていきたいと思う。

また、今回のケースでは、太田の認知発達の理論に基づいて教育相談を続けることにより、ケースの進め方を学ぶことができたと思う。対象児の実態を的確に把握し、そこから適切な指導計画を作成し実践することは、経験や数多くのスーパーバイズなどを受けることが必要となるが、このようにケースの進め方を経験が浅い担当者でも見通しを持ちながら取り組むことができるこの個別発達プログラムは、有効であると感じた。

今後は、さらに一つ一つのケースを充実させていけるよう、自分自身の資質と専門性を高めていきたいと思う。

2 目標設定・支援方法の妥当性及び支援の効果等

課題や遊びをとおし、無理なく、少しずつ、段階を踏んで言語理解を促すことを大切にして関わってきた。母親には現在の状態と今後の発達の筋

道を丁寧に伝え、今は課題をとおしてのやりとりの中で言葉を増やしていきたいという話をした。家でも言葉は増えてきているとの話があった。

特別支援学校の専門性に関する質問があったので説明を行った。C大学言語聴覚クリニックを紹介したが、今のところそこまでは望んでいない。自由遊びをなかなか切り上げられないことが多いということなので、「これをやったらこれだけやったら終わりだよという約束をするなど、見通しを持たせて関わるのが大切です。」という話をした。

現在は、幼児教育相談室に通室することが好きで、そこで楽しく学習に取り組んでいる本児の姿に満足しているとのことであった。

物の用途については確実にないところもあったので、その辺の充実と指示理解が十分できていない課題を行っていく必要がある。太田のStageでは、StageⅢ-2ということであるが、StageⅢ-1の後期の課題を中心に取り組んでいければと思う。

V まとめと今後の課題

今回の事例をとおし、時間をかけてしっかりアセスメントすること、そして、個別発達プログラムを作成し、実践、評価することの大切さを学ぶことができた。特に、発達障害に関しては、指導のノウハウが特別支援学校にはあまり蓄積していないので、今後の指導に十分生かすことができる。

保護者は、特に発達障害の場合については、障害名がはっきりしているわけでもなく、何らかの疑いがある程度で、いろいろな相談、療育機関を掛け持ちしていることが多くみられる。今後は地域の関係諸機関と連携し、ネットワークを十分図っていくことも大切である。時に他機関との差別化をどう作っていくかを検討していく必要がある。

VI 引用参考文献

- 1) 石隈利紀 (1999) 学校心理学、誠信書房.
- 2) 木谷秀勝 (2003) 高機能自閉症児の内的世界への理解について-学校不登校で来談した2事例の描画からの分析-臨床描画研究-.
- 3) 杉山登志郎 (2001) 高機能自閉症とアスペルガー症候群-さまざまな問題行動の克服-月刊実践障害児教育.
- 4) 杉山登志郎 (2000) 発達障害の豊かな世界. 日本評論社.
- 5) 中央教育審議会初等中等教育分科会報告 (2012) .
- 6) 藤田継道 (2004) 特別支援教育と学校心理臨床-その具体的方法-. 教育と医学.
- 7) Frith, U. (1991) .Autism and Asperger syndrome. 富田真紀訳. 自閉症とアスペルガー症候群. 東京書籍.
- 8) 文部科学省 (2003) 今後の特別支援教育の在り方について (最終報告) .
- 9) 文部科学省 (2004) 小・中学校におけるLD、ADHD、高機能自閉症の児童生徒への教育支援体制の整備のためのガイドライン (試案) .

(山形県立米沢女子短期大学教授)